

3 海の中を探けんしよう

4 魚はどんな洋服がすきなのか

5 水の中で球根を育ててみよう

Ⅲ まわりにある形と友達になろう

1 どんな自動車に乗ってみたいかな

2 動物の足あとをたどっていくと

Ⅳ 花や根っこや土と友達になろう

1 タネからどんな芽が?

2 一本の苗木から、どんな花が咲くのかな

3 太った根っこ、細い根っこ

4 どうしてスイカはまるくなるのかな

5 リンゴはどんな生活をしているのかな

Ⅴ 虫と友達になろう

1 アオムシくん達は野原でどんな遊びをしているの

かな

2 野原の虫や小鳥達は菌をみがくのかな

3 バッタになって、たのしく遊ぼう

4 チョウにもきれいな洋服をさせてあげよう

5 カマキリにもきれいな洋服をさせてあげよう

6 アリくん達は毎日なにをしているのかな

Ⅵ 空をとぶ鳥や風船と友達になろう

1 小鳥になって空を散歩しよう

2 小鳥になって森を散歩しよう

3 ワシになって空をぐんぐんとんでみよう

4 風船が空にとんでいったら……

# 『あかちゃんの本箱』

原題 Babies Need Books

D・バトラー 著／横山真佐子 訳（ブック・グローブ社）

永田 桂子

表題が「あかちゃん」とあるので、乳児、あるいは〇、一、二歳児の本のことかと思いますが、そうではありません。幼児期全般の本について書かれたものです。

第一章 なぜ絵本なのか、

第二章 〇歳児は…、

第三章 一歳になりました、

第四章 二歳になりました、

第五章 三歳になりました、

第六章 四歳になりました、

と年齢を追って乳幼児と本とのかかわりが大変わかりやすく解説してあります。

著者は『クシュラの奇跡』（のら社）をあらわ

したドロシー・バトラーです。お読みになった方はご存じのように、彼女は現在ニュージランド、オークランド市で児童書専門店を営んでいます。自らの子育ての経験をふまえて、またクシュラを含めた孫たちとのふれあいを通じて、そして多くの母親の読書指導をするなかから、彼女が確信したことだからを丁寧に語っています。

内容の運びは、たとえば「平均的な二歳の子は、よく動きまわり、よくしゃべり、そして、一度こうと思ったら、なかなか決心を変えません。」と、まず発達特徴を述べることから始まります。

そして「二〜三歳用の本には、現実により得る

状況の中で、実際に実現可能な行動を取るキャラクターたちが登場する、という形式が要求されています。」とその年齢の子どもの理解にあわせて、物語の一般的形式を述べ、具体論に移っていきます。ところどころに子どものエピソードを交えながら、それでいて主観に陥ることなく語られていきますから、絵本を研究しようと考えている人にはとても参考になるでしょう。もちろん、子どもにどんな本を選んだらよいのかしらと、現実的な情報を求めている人にも役立つ一冊です。

ドロシーは二、三歳の子どもに適したキャラクターとして、どろんこハリー、マリー、ガンピー、スモールなどをあげています。けれども、それらのシリーズ全部がよいというのではなく、なかには、この年齢にふさわしくないものがある。と述べ、『まりーちゃんといっしょ』（フランソワーズ・文&絵・与田準一・訳／岩波書店）を例にあげます。

このお話は、マリーちゃんが羊のバタポンに「おまえは いつか こどもを 一ぴき うむでしよう。そしたら……」「おまえは こどもを 二ひき うむかもしれないわ。そしたら……」と次々に想像をふくらませながら語りかける物語です。十四まで想像していき、絵も文章に伴って七匹まで描かれていきます。ところが結末はたった一匹しか生まれませんでした。絵も七匹から急遽一匹になります。これを読んでもらったドロシーの三歳の長女は「他の小羊たちはどうなったの？」と困惑してしまっただけです。もちろん一年後には、こうした困惑は消えうせていたそうです。

子どもと本の関係をみるには、子どもにその内容がわかるか（すなわち楽しめるか）という問題と、本が本そのものとしてすぐれたものかという問題の二つがあります。この二つをドロシーははっきりと分けてとらえ、それぞれを的確に論じています。その点が、ドロシー・バトラのすば

らしいところですよ。

また、本を仲立ちにしたおとなと子どもものやりとりにも、こんなエピソードも紹介されています。

二歳半の孫がドロシーの家にやってきました。絵本をプレゼントしたところ、孫はそれを大変気に入って、まわりの大人達に何回も読んで読んでとせがみます。それに閉口した両親は、帰るとき、わざと絵本を忘れていったのです。

これを、単にエピソードとして終わらせるのではなく、章を改めたところで、親へのアドバイスにつないでいくという巧みな理論展開もしています。

「…幼い子にとってひとつの作品にとことん溺れこんで、毎日毎夜その本を繰り返して読んで、ねだるのはごく普通のことです。…(略)…こういう場合あなたがすべきことは、歯をくいしばって読み続けることだけです。…(略)…この時、その本は多分その子の一部となって入るのですから、

あなたが反対すると、そのことを子どもは裏切りと、とるかもしれない。これほどその本に子どもが身を入れていいるなら、たとえその必要性や、それによる満足がおとなには全然理解できないにしても、大切なものなのです。」

その他、「判型の大きさも大切な要素です」と本の造りにふれたり、写真絵本や白黒絵本について、最初にすすめる昔話についてなど、絵本を考究するときにつきあたる初歩的な問題もとりあげて、彼女なりの見解を率直に述べています。

近年、絵本を語る本は多く、この五年の間に単行本だけでも三十五冊ほど出版されています。そのなかで最も説得力があり、すぐれた客観性をもって書かれている一冊がこの本です。一行一行がすべてウンウンとうなずきながら納得して読める本です。

(東京女子体育短期大学・武蔵野女子大学講師)